

〈実践報告〉

人権教育における「視覚的なもの」の可能性と課題 — 「分かりやすさ」に潜む陥穽をめぐって —

阿部 潔

2009年度に人権教育研究室では合計三回の研究会の場を持った。第一回として2009年6月22日に在米写真家のトシ・カザマ氏を講師に「死刑と人権—死刑の現実と想像の差—」を、第二回として2009年10月23日に「ビッグイシュー基金」との共同企画で「ストリートを生きる人びと—写真が伝える路上生活—」を、第三回として日系の美術史研究者リン・ホリウチ氏を招いて「日系収容所の画家ミネ・オオクボ」を開催した。カザマ氏は自身が撮った死刑受刑者本人やその家族／友人たちの写真を紹介しながら「死刑制度」について考える貴重なキッカケを与えてくれた。「ビッグイシュー」販売員たちを迎えてのトークセッションでは、路上生活を「写真」で伝えることの意義と課題が浮き彫りになった。ホリウチ氏は日系収容者での生活を描いたミネ・オオクボの作品を紹介しながら、収容所における人々の日常を歴史的な観点から検討する意義を示した。このように三つの研究会はそれぞれに異なる問題意識に基づき、異なるテーマについて、異なるアプローチから「現代における人権」について探求することを目指したものである。しかしながら、そこにはある共通点が指摘できる。それは人権について考えるうえでの「視覚的なもの」の有効性に関する関心である。具体的には「写真」であれ「絵画」であれ人々の

眼＝視覚に訴える媒体を用いて人権をめぐる問いかけをすることに、どのような意義と有効性があるのか。必ずしも人々が深い関心を抱いているわけではない「現代における人権」というテーマについて、その重要性を認識してもらうために、どのように写真や絵画を活用できるのか。そうした人権教育と視覚的媒体との関係をめぐる問題意識が、それぞれの研究会に通底していたように思われる。「視覚的なもの」の可能性について考えることは、人権をめぐる教育と研究に携わるすべてのものにとって、避けて通ることができない大きな課題にほかならない。なぜなら、現代社会における人権をめぐる危機や窮状についてより多くの人々の関心を喚起し、その改善と解決へと向けた議論や実践を深めていくことは、人権教育を押し進めるうえで不可欠だからだ。その意味で、今年度の三回にわたる研究会は、人権教育研究室が今後取り組むべき課題について多くの示唆を与えてくれる内容であった。そのなかでも「ビッグイシュー基金」との共催のかたちで、一週間にわたる写真展「大阪“路上”の風景」とのセットで開催されたトークセッション「ストリートを生きる人びと」で繰り広げられた議論を紹介しながら、今年度の研究活動を通じて明らかになった人権教育の可能性と課題について考えてみたい。

ホームレスとはどのような人々ですか？

こうした問いを投げ掛けられたとき、人々はなにかしらのイメージを思い描くはずだ。例えば、仕事がなく困っている人たち。住む家がなく、河原や公園で暮らしているオッチャンたち。もしかすると、真面目に働かない怠け者で好き勝手に気楽な生活をしている連中、といった否定的な印象を持つ人もいるかもしれない。他方で、一生懸命に生きようとしながらも、なかなかチャンスに恵まれず苦境に陥っている失業者たち、という厚意と同情が織り混ざったイメージを抱く人もいるだろう。いずれにせよ、私たちはなにかしら具体的なイメージを「ホームレス」に対して持っている。だが、少し考えて見れば明らかなように、これらのイメージは自分自身の体験や実感に必ずしも根ざしたものでないことが少なくない。テレビのニュースで報じられた映像や、新聞や雑誌の写真で伝えられた「ホームレスの姿」を目にするなかで、私たちは「ホームレスとはどのような人々ですか？」という問いに対する「答え」を手に入れている。だがしかし、これも少し考えれば明らかなように、多くの場合そうした「メディアが伝えるホームレス」が引き起こすイメージは、どちらかというとな否定的なものになりがちである。家のない人びと、職のない人びと、家族のない人びと。なにかしら大切なものを失った可哀想な人たちとして「ホームレス」を描き出すことは、メディアがホームレス問題を報じる際の常套句だともいえる。

否定的なメディア表象に取り囲まれている私たちは、とするとホームレスと総称される人々の一部分だけに触れることで、あたかもその存在全体を分かった＝知ったかのように思いがちである。こうした特定のイメージに基づく認識が社会に広く分かち持たれていることが、未成年者による襲撃や行政の不適切な対応によってホームレスの

人々の人権が脅かされ蹂躪される事態が繰り返し起こっているにもかかわらず、必ずしも多くの人々がそのことに対して憤りを覚えないことの背景にある。そのことがホームレス問題に取り組む実践者や研究者のあいだで、これまで度々指摘されてきた。

「ビッグイシュー基金」が企画・開催した写真展「大阪“路上”の風景」は、そうした野宿者＝ホームレスの人々に対する否定的イメージが社会全体に広まっていることを前提としたうえで試みられている。つまり、一般的に抱かれている「ホームレスの人々」の印象や評価とは異なる視覚的イメージを提示することが、そこでは目指されていたのだ。今回の写真展にはプロのカメラマンである高松英昭氏の写真とともに「ビッグイシュー」の販売員たちが自らの手で撮影した写真が数多く展示された。写真展を訪れた人々の多くは、ホームレスと呼ばれる人たち自らが撮影した彼ら／彼女らの日常生活をリアルに描き出した写真とそれに添えられたユーモア溢れるキャプションを通じて、普段日常的に触れているマスメディアを介して伝えられるのとは異なる「ホームレスの姿」を知ることができたに違いない。その意味で視覚的な媒体＝写真を用いての問題提起には、大きな意義があったといえる。関西学院大学図書館ロビーに設置された写真展会場を、学生・教職員のみならず地域住民も含め多くの人々が訪れた。それだけでも、写真展の開催は人権教育の実践として大きな意味を持っていた。

しかしながら、視覚的な訴えかけには大きな落とし穴も潜んでいる。一見しただけで「分かりやすい」視覚情報は、それ以上の関心の広がりや理解の深まりをときとして阻害してしまう。なぜなら、私たちは分かりやすく感動的な視覚情報を与えられると、あたかもそれで全てが分かった＝理解できたと思いがちだからだ。もしも写真展が伝

える野宿者たちの姿をただ単に視覚的に受けとめて、そのことをもってあたかも全てが分かったような気持ちになってしまうならば、それはマスメディアが伝えるネガティブなイメージが少しばかりポジティブなそれに反転しただけで、結局のところ「ホームレスとはどのような人々ですか？」との問いかけに対する認識自体は、さして深まらないことになりかねない。こうした危険を鑑みる時、写真展と同時に開催されたトークセッションに期待された意義が明らかになるだろう。

トークセッションでは「ビッグイシュー」代表の佐野章二氏から社会的起業としての「ビッグイシュー」の理念について話を聞いたうえで、今回の写真展に作品を提供した高松氏と販売員＝カメラマンたちを交えて、「写真を撮る」ことをめぐる楽しさと戸惑い、意義と困難、可能性と危険性について自由に語り合う場を設けた。そこから見てきたのは、一枚の写真＝作品の背後に潜む作者の深い思いと同時に迷いであった。高松氏は、写真集『STREET PEOPLE』として刊行した自身の作品に対して、肯定的な評価と同時に懐疑的な意見があることを十分に承知していた。むしろ、作品を発表する前から疑問や批判が出されるであろうことを高松氏は見越していたかのように、私には思われる。つまり、ファッション雑誌に登場するようないでたちの「ホームレスの人々」の姿ばかりを撮った高松氏の写真集では、厳しい現実には直面している彼ら／彼女らのリアルな姿が全然捉え切れていないではないか。そうしたある意味で凡庸ともいえる非難が投げ掛けられることなど、高松氏は最初から読み込み済みなのだ。そのうえで敢えて、意図的かつ挑発的にファッション雑誌に登場するようなカッコいい／オシャレなホームレスの姿を高松氏は人々にぶつけた。それはどうしてなのだろうか？ その理由は、私たちがなかなか無意識に抱いている「ホームレス」に対するイメ

ージを根底から揺るがすと同時に、そもそも「ホームレス」になんらの関心も興味も抱いていない圧倒的多数の人々の関心を、なんとしてでも引きつけるためである。その意味で、手に取る人の意表をついた高松氏の写真集は、二重にも三重にも考え抜かれた表象戦略のもとに作り上げられていたといえよう。オシャレな服に身を包み、カメラに向かってポーズを取るホームレスの姿を映した写真に込められた深い思いが、トークセッションでの高松氏の物静かな語り口を通して伝わってくるように感じられた。

他方、販売員たちが撮った写真は大変にリアルで、そこからは彼ら／彼女らの日常が鮮やかに伝わってくる。だからこそ、写真展を訪れた人々の多くは当事者たちが撮った写真群を前に感銘を覚え、ホームレスたちの実情をよりよく知り得たと感じたに違いない。そのこと自体は事実であるし、販売員カメラマンたちの写真を介して多くの人々の関心を得られたことは、今回の写真展の大きな成果であった。だが同時に、トークセッションでの販売員カメラマンたちの話を聞きながら私自身は、「視覚的なもの」を用いて人々になにかを伝えることに不可避免的に伴う困難について改めて考えさせられた。その最たる理由は、販売員のひとりが自らの写真撮影の経験を踏まえつつ「写真って、怖いなぁと思った」と語ったからである。

彼はある女性ホームレスの姿をカメラに収めた。そこに至る過程で、彼にはさまざまな葛藤があった。自らも野宿生活を強いられていれば「野宿する姿」を他人に撮られることが当事者たちにとって嫌なことを、彼ら自身が誰よりも強く感じているに違いない。さらに、自分がカメラを手にとろうとしている対象は、ほかでもない自分たちの「仲間」なのだ。顔はおろか後ろ姿を撮ることさえ憚れるのは、当たり前であろう。トークセッションのなかで投げかけられた、どうして販売員カメ

ラマンたちが撮った写真のほとんどに「ホームレスの姿」が写っていないのかとの問いに対する応答のなかで彼は、「仲間うちを売って、どうすんねん」との思いがあったことを振り返りつつ、自らの心情を吐露していた。それにもかかわらず、結果的に彼は一人の女性ホームレスの姿を撮った。そしてその写真はマスメディアで取りあげられ、人々の関心と反響を呼んだのである。その結果、なにが起こったのか。被写体となったホームレスの女性は、その後すぐにそこから消え去ってしまった。本当の理由は今では誰にも分からない。けれども、その写真を撮った販売員カメラマンは、「仲間」の一人が姿を消してしまったという事実へのわだかまりをぬぐい去ることができない。自分たち野宿者の窮状を世間に訴えるために撮った一枚の写真が、目の前にいた「仲間」の生活／人生を変えてしまったのではないか。そのことへの自責の念も込めて彼は「写真って、怖いなぁと思った」と呟いたに違いない。

ここに示されているのは「視覚的なもの」の有効性と同時に、そのはかり知れぬ暴力性だ。写真に撮られることで、その対象はより多くの人々に知られ、関心や興味を抱かれる。「ホームレス」をめぐる社会問題への世間の意識を喚起するうえで、それは強力な手段＝武器になる。だが同時に、写真に撮られた対象＝「仲間たち」は自らのコントロールがおよばない力学のただ中に投げ込まれてしまう。そのとき「視覚的なもの」は啓蒙のための利器ではなく、たとえ意図せずにはあれ、他者の人権を危機に陥れる凶器になり得てしまう。自らの撮影体験に関する販売員カメラマンたちの話からは、「写真を撮ること」の恐さと危うさを彼らが我が身に引き付けながら感じていたことが、ひしひしと伝わってくるようであった。二重の意味での当事者である販売員＝カメラマンたちの生身の声を通して、できあがった作品＝写真をただ

単に見ているだけでは決して私たちに分かりえない「何ごとか」が、消えゆく残響のように聴こえてくる。一枚一枚の写真それぞれに、撮影したもののたちのこだわりと、撮影されたものたちの人生が刻み込まれている。そのことを感じ取り、彼ら／彼女らが置かれた境遇に対して、たとえ究極的には不可能であろうともできるかぎりの想像力を馳せること。それこそが「ホームレスとはどのような人々ですか？」との問いかけに答えていく第一歩なのではないだろうか。そうした他者理解に求められる「深度」は、一見すると分かりやすい「視覚的なもの」が私たちに引き起す感動や衝撃の「強度」をもってしては、やはり達成できないに違いない。「視覚的なもの」によって可能となる人びとの関心や興味の喚起を表層的な「分かった」で終わらせるのではなく、かぎりなく多様で、ときとして矛盾と不条理に満ちた複雑な現実世界を少しでも深く理解するためのキッカケを生み出すこと。それこそが、当事者たちによるトークセッションを開催することの意義なのだと思う。

「視覚的なもの」は現代社会において大きな力を発揮している。人権をめぐる危機や窮状についてより多くの人びとを巻き込みながら議論するうえで、写真や映像をはじめとする「視覚的なもの」を活用することが、今後さらにその重要性を増していくことだろう。その際に私たちが忘れてならない大切なことを、今年度の各研究会はそれぞれ異なるかたちで告げ知らせていた。具体的で感動的な「視覚的なもの」を介して情報を得た私たちは、ともすると安易に分かった＝理解した気になりがちだ。しかしながら、私たちが日々接している「視覚的なもの」は、多くの場合ものごとの一大部分だけを「分かりやすく」伝えたものにほかならない。現実社会の生きられた事象は、そうした視覚表象と比較してより複雑かつ多様なものだ。

たしかに「視覚的なもの」は、人々の感動や共感を得るための手段として大変に優れている。具体的に目に映るものは、より多くの人々の関心を引きつけ社会における変化をもたらすうえで有効な道具になりうる。しかし同時に、そこには大きな暴力が生まれる契機も潜んでいる。写真や映像を撮る／撮られるという関係性は、つねに支配／被支配という不平等な関わり合いを生み出す危険と隣り合わせなのだから。

「視覚的なもの」が孕む両義性をしっかりと肝に命じたうえで、それが人権教育にどのように資するかを具体的な実践を通して試みていくこと。それこそが、来年度以降に私たちが人権教育研究室において取り組むべき課題である。

